

アイ・アム・レジェンド

2007(平成19)年12月16日鑑賞<梅田ピカデリー>

★★



監督＝フランシス・ローレンス／原作＝リチャード・マシスン『アイ・アム・レジェンド』(ハヤカワ文庫刊)／出演＝ウィル・スミス／アリーシー・ブラガ／ダッシュ・ミホック／チャーリー・ターハーン／サリ・リチャードソン (ワーナー・ブラザーズ映画配給／2007年アメリカ映画／100分)

……ウイルスが蔓延する中、ニューヨークにたった1人生き残った男という設定は面白い。しかし、ウィル・スミスの熱演にもかかわらず、一人芝居にはやはり限界が……？ 同じテーマなら、ロンドンを舞台にした『28日後…』(02年)や『28週後…』(07年)の方が、圧倒的に上……？

久しぶりに80%の入りだが……

12月14日(金曜日)公開のこの映画を、12月16日(日曜日)1時50分からの上映で観たが、梅田ピカデリーは久しぶりに80%の入り。しかも、若いアベックから中年のおじさん、おばさんまで年齢層も幅広い様子。多分これは、「66億人の絶滅と、たったひとりの生存者——」という事前広告の面白さと、『メン・イン・ブラック』(97年)や『幸せのちから』(06年)などのウィル・スミスという俳優の名前のおかげ。しかして、その映画の出来は……？

ネビルとサム在日常風景は少し退屈……？

予告編では人っ子1人いないニューヨークのまちの中で主人公が思いきったドライブショットをしている姿が登場していたが、この映画前半はニューヨークでたった1人生き残った主人公ロバート・ネビル(ウィル・スミス)が愛犬サムと共に過ごす日常風景を描写していく。

時代は2012年。彼が1人きりになってから既に3年が経過したらしい。映画冒頭は助手席に愛犬サムを乗せ、真っ赤なムスタングで、無人のニューヨークをつっ走る

ネビルの姿が登場する。彼の日常生活は、誰もいない店で買い物をし、お馴染みのビデオショップでDVDを借り、セントラルパークにつくった畑を耕すこと。おっと面白いことに、狩りをして獲物を手に入れるのも大切な仕事……。サムを相手に、あるいはマネキン人形を相手に、何かと話しかけながら孤独をまぎらわせて生きるネビルの日常風景は、それなりに工夫してスクリーン上に表現されているものの、観ている方は意外と退屈……？

ダーク・シーカーズとは……？

ニューヨークのまちの人々がネビル以外みんな死んでしまったのはあるウイルスが蔓延したせいだが、そんな設定の恐怖感、ダニー・ボイル監督の『28日後…』(02年)やファン・カルロス・フレスナディージョ監督の『28週後…』(07年)の方が、『アイ・アム・レジェンド』よりずっと上……？

ダーク・シーカーズとは、ウイルスの副作用によって肉食の化け物に変えられてしまった感染者の姿。このダーク・シーカーズがこの映画の売りの1つ。また科学者である主人公ネビルは、なぜかウイルスに対して免疫力をもっていた自己の肉体からダーク・シーカーズの凶暴性を奪う血清をつくり出したいと考え、1人孤独な実験を続けている科学者という設定。しかし、そこらあたりの科学的な問題点がよくわからない。この映画のクリーチャーであるダーク・シーカーズの魅力(?)もイマイチ。これも、『28日後…』の感染者の方がリアリティが上……？

昼間はいいが、夜は……

ダーク・シーカーズは紫外線に極端に弱いらしい。したがって、昼間の明るいところは安全だが、夜になると怖い。ネビルが今日まで生き延びてこられたのは、その隠れ家をダーク・シーカーズたちに覺られないように十分気をつけていたため。したがって、夜は銃を抱きながらサムと2人で怯えていたが、昼間明るいところはオーケー。

しかし、ある日獲物を追ってビルの中に入り込んでいったサムとその後を追ったネビルは……？ そんなスリリングなエピソードを挿入しているが、何だかこれもとってつけたような感じ……。

絶体絶命の危機だったが……

映画はその後もネビルの孤独な日常風景とその中でさまざまな闘いを描いていくが、遂にある日愛犬サムまで失うことに。そんな怒りのために少しばかり判断力を狂わされたのか、ネビルはある夜車に乗ってまちへ。そりゃやばい。夜になるとダーク・シーカーズがうじゃうじゃ集まっているのでは……？

もちろんネビルはそれを知りながら、怒りにまかせて車でダーク・シーカーズたちをバツバツとひき倒していったのだが、何せ奴らは数が多い。たちまち車はその機能を失い、転覆させられ、割られてしまった窓ガラスの外からは、ダーク・シーカーズの顔がネビルに食らいつく寸前に。そんな絶体絶命の危機を救ってくれたのは明るいライトの光だが、さて死に絶えたニューヨークで、ネビルをそんな形で救助してくれたのは一体ダレ……？

ちょっと出来すぎ……？

パンフレットによると、1954年に書かれたリチャード・マンスンの同名の原作は既に2度映画化されているとのこと。すると、半世紀以上を経た今、3度目の映画化をするにあたっては、どんな脚本にするかが大きなポイント。映画では、ネビルは毎日AM放送でメッセージを流し続け、自分以外の生存者を探し続けていたが、今日まで3年間誰も巡り合っていない。ところが、この映画（の脚本）では、ダーク・シーカーズとの格闘に敗れ、絶体絶命状態にあるネビルの前に現れたのが、生存者のアナ（アリーシー・ブラガ）とその息子だったという設定にビックリ。

ネビルがソファの上で目を覚ますと、アナが傷の手当てをしてくれたうえ、食事の準備をしてくれていた。アナは生存者が生活しているある村へ行く途中とのこと。しかし、こりゃあまりにも話がうまく出来すぎているのでは……？

他方、夜の間に隠れ家に到着するとダーク・シーカーズから後をつけられる危険があるため明るくなってから到着するように、と指示していたにもかかわらず、今や隠れ家の外では何やら怪しげな音が。そこでアナに確かめてみると、隠れ家に到着したのは明け方だったとのこと。大量のダーク・シーカーズに攻め込まれたら、いくら防御体制をとっているといっても、こんな隠れ家や地下の研究室はイチコロ。遂にネビルの3年間の苦労も水の泡か、と思ったが……。

真のテーマとオスカーの可能性は……？

この映画のパンフレットにある尾之上浩司氏のTEXT「伝説の作家リチャード・マシスン」では、「まったく救いのない世界のなかで、人間がいかにも理性と希望を失わずに生きていけばいいのか、そもそも生きていけるのか。『アイ・アム・レジェンド』の真のテーマはそこにある」とし、「人間ドラマとして深みのある『アイ・アム・レジェンド』は、そんな楽しみ方もできる傑作なのだ」と書いてある。

また、よしひろまさみち氏のTEXT「ショウビズ界の伝説（まで、あとわずか？）ウィル・スミス」では、「本作『アイ・アム・レジェンド』はひょっとするとひょっとして……？」とオスカー（主演男優賞）受賞の可能性まで示唆している。

たしかにこの映画では90%がウィル・スミスの一人芝居といっても過言ではないほど、彼の姿がスクリーン上に登場するから、ウィル・スミスの演技の出来が映画の出来を大きく左右することになる。それを当然の前提として、私は「少し退屈」と評価したのだが、尾之上氏もよしひろ氏もそうではないらしい。そこでさて、あなたの評価は……？

2007(平成19)年12月18日記